

『実習指導を通して伝える看護
看護師を育てる人たちへ』

個別の経験に込められた ヒントと救い

著：吉田みつ子／定価：本体 2,300 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



看護教員であれば、「情報収集に途方に暮れる学生にどう接していますか？」という問いをもったことがあると思う。他にも「学生の身だしなみ」「習ったことと違う！」など、実習指導における「あるある」な 21 のシーンをこの本は読み手に問う形で投げかけている。私も看護教員として、ここで紹介されている場面は読めば読むほど「あるある」「わかるわー」と共感してしまう場面であった。

1 つひとつのシーンで、読んでいる自分がその場にいて各シーンを経験しているかのような感覚になって感情移入でき、心揺さぶられてしまうことが何度もあった。これは、著者が臨床指導者、学生、看護教員それぞれの世界のまなざしから、1 人ひとり固有の経験としてそれぞれの場面を解釈しているからだろう。

特に印象に残ったシーンは「受け持ち患者さんが亡くなったとき、学生にどのように関わりますか？」という問いかけである。本書では、臨床指導者は亡くなった患者さんを受け持っていた学生に「びっくりしたでしょ」と声をかけ、病棟の師長は学生を労い、学生が知らなかった受け持ち患者さんの病気の経過や治療に対する思い、生き方を学生に語る。師長の語りは学生が患者さんの突然の死をのみ込むきっかけをつくる実践が紹介されている。しかし、このような場面にはこれが正しいかわり方である、という表現ではなく、それ

ぞれがそれぞれの立場で、その経験にどのように向き合うのかということがリアルに想起されることばで表現されている。

看護学生を含めた看護職が存在し経験された世界で、正しい答えはケアを受ける者が心地よいと思えることであり、科学的な力では明らかにできない部分も未だある、限られた時間の中で学生の学びが、よりよいものとなるようにという目的は変わらない。

誰もが遭遇する実習指導場面はもやもやとした形でそのまま残り、指導を続けるなかで特に解消されるわけでもなく、私たちに問い続けるものとして残っていく。同じような内容の場面でも、2 回目に経験したとき、3 回目に経験したときでは違う世界として経験されるのではないだろうか。つまりいたところからまた立ち上がるには、既存の枠組みを離れ、新たな視点が必要なのである。

この書籍は、そうした実習指導について、あくまでも読み手に伝わりやすい言葉で語りかけてくれ、「このようなまなざしで指導場面をとらえなおしてみるといいよ」と実習指導に携わっている者へ、常に救いの言葉を与えてくれるありがたい一冊である。